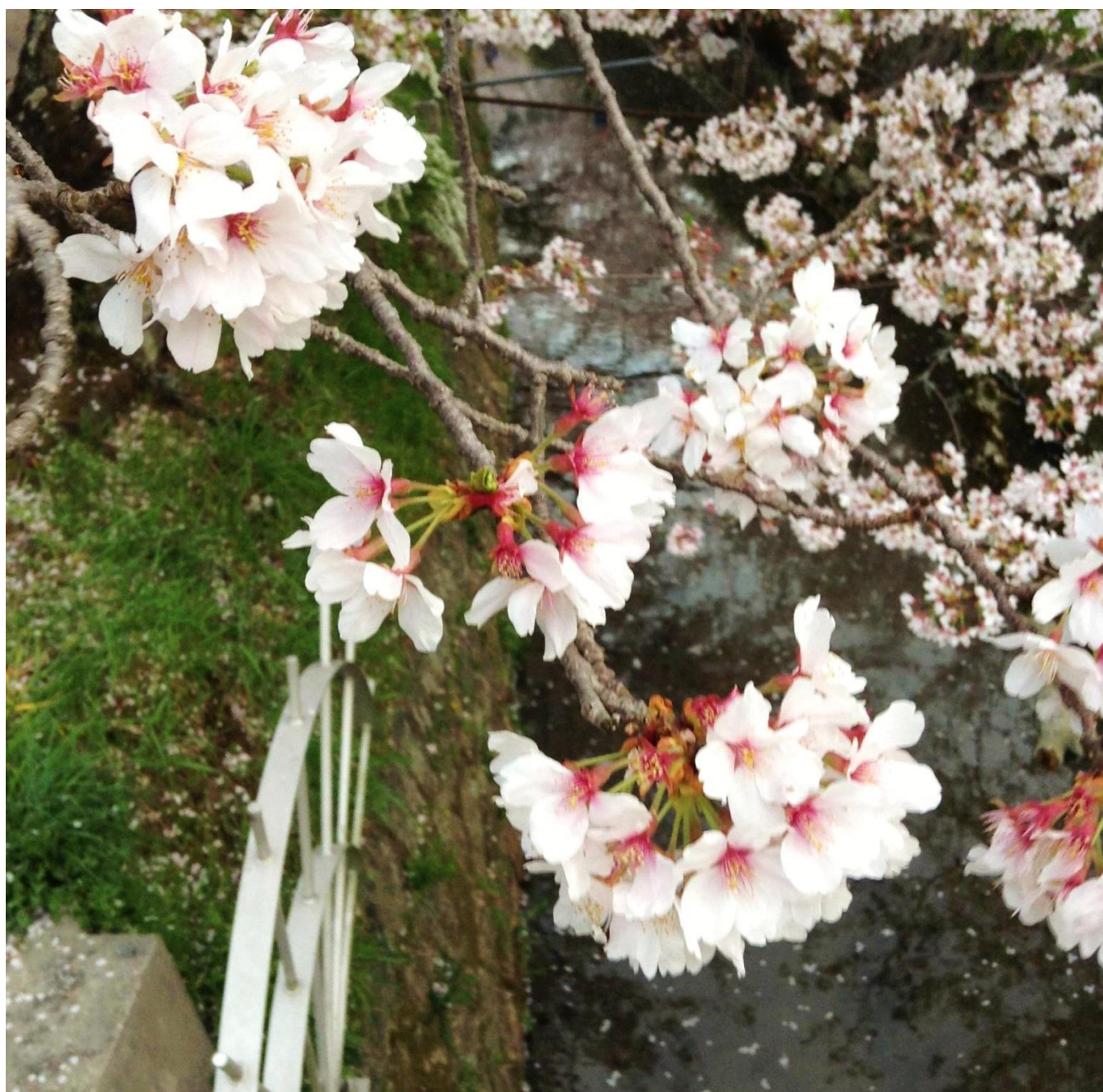


Asian Journal of
**HUMAN
SERVICES**

Printed 2013.0430 ISSN2186-3350

Published by Asian Society of Human Services

*A*pril 2013
VOL. **4**



Asian Society of Human Services

ACTIVITY REPORT

ボランティアと認知症高齢者の コミュニケーションの分析

Analysis of the communication between volunteers and elderly people with dementia

納戸 美佐子¹⁾ (Misako NOTO), 野瀬 真由美²⁾ (Mayumi NOSE)
仙波 梨沙³⁾ (Risa SENBA), 上城 憲司⁴⁾ (Kenji KAMIJYOU)
中村 貴志⁵⁾ (Takashi NAKAMURA)

- 1) 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科

Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

〒803-0835 福岡県北九州市小倉北区井堀 1-3-5

no_misako@yahoo.co.jp

- 2) 株式会社フジケア グループホーム高峰

Group home takamine

- 3) 佐賀大学医学部附属病院 先進総合機能回復センター

Advanced Comprehensive Functional Recovery Center. Faculty of Medicine, Saga University

- 4) 西九州大学リハビリテーション学部作業療法学専攻

the Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyushu University

- 5) 福岡教育大学教育学部特別支援教育講座

Faculty of Education, Fukuoka University of Education

Received

March 7, 2013

Accepted

April 16, 2013

Published

April 30, 2013

ABSTRACT

本研究では、認知症高齢者の帰宅願望などが継続した場面と消失した場面でのボランティアの関わりの特徴について、機能的アセスメントを用い、ボランティアの関わり方が認知症高齢者の反応に及ぼす影響について客観的に示すことにより、認知症高齢者とのコミュニケーションを円滑にする方策について検討することを目的とした。

その結果、帰宅願望がみられた場面では、認知症高齢者の話を傾聴し、さらに、認知症高齢者の好む話題や興味をもつ活動を提示することにより帰宅願望が消失する傾向がみられた。また、重度認知症高齢者においては、言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションを用いた関わりが重要であることが示された。機能的アセスメントを用いることによって、ボランティアの関わりによる認知症高齢者の反応の違いが示された。調査対象を増やすとともに、機能的アセスメントに基づいた支援計画を策定し、介入的な研究を行うことにより、ボランティアの関わりが認知症高齢者に及ぼす影響を明らかにすることが必要である。

<Key-words>

認知症高齢者, グループホーム, ボランティア, 機能的アセスメント

elderly people with dementia, group home, volunteers, functional assessment

Asian J Human Services, 2013, 4:149-158. © 2013 Asian Society of Human Services

I. はじめに

わが国において、「話し相手ボランティア」は、1980年代頃から、主に在宅高齢者を対象とする社会福祉サービスの担い手として始まり（横山，2007）、現在、「話し相手ボランティア」や「傾聴ボランティア」などの名称での活動がみられる（保科・奥野，2008）。

保科（2010）は、認知症ケアの視点からも対話の困難な高齢者への働きかけを行うことのできるボランティアの育成が必要であることを指摘している。また、先行研究において、ボランティアが認知症高齢者へ話しかける話題によって、認知症高齢者の発言数が変わることが示唆された（納戸・上城・野村・平澤・野瀬・中村，2010）。このことから、認知症高齢者を対象としたボランティア活動においては、特に関わり方についての配慮が必要であることが考えられる。しかしながら、実際の関わり場面を用いて、ボランティアの関わりが認知症高齢者に及ぼす影響について検討した報告は、ほとんどみられない。近年、発達障害者の行動障害に対して、「Positive Behavioral Support（以下、PBS）」が用いられるようになってきている。このアプローチでは、行動障害への対応において、行動障害が生じた後の事後的対応よりも、予防的対応が重要であることが指摘されている。このアプローチによる支援の効果は、適応行動の増加、行動障害の減少、QOLの向上から評価されている（Bambara L. M. & Knoster T., 1998）。このアプローチでは、機能的アセスメントの方法論が中心となっている。機能的アセスメントとは、行動障害の生起と機能的に関係している先行事象と結果事象についての情報を集めるプロセスである。機能的アセスメントの方法は、間接法、直接観察法、実験法に大別される。直接観察による機能的アセスメントは、一般にABC観察と呼ばれる（AはAntecedent:先行条件、BはBehavior:行動、CはConsequence:結果条件）。ABC観察は、直接観察・記録できることから正確な情報を得るこ

とができる。(Raymond G.M.,2001 (訳) 園山繁樹・野呂文行・渡部匡隆・大石幸二, 2006)。機能的アセスメントを用いることにより、行動障害の生起にかかわる先行条件と結果条件を改善する(Carr E. G., Nancy A. L. & Scott C. Y., 1999 ; O'Neill R. E., Horner R. H., Albin R. W., Sprague J. R., Storey K. & Newton J. S., 1997)。

野瀬・納戸・中村(2007)は、介護上の負担が大きく、帰宅を望む・要求する発言(以下、帰宅願望)がある認知症高齢者を対象に、機能的アセスメントに基づいて、日常生活の中に本人の好きな活動を取り入れることで帰宅願望が生起しなくても済むという予防的視点を取り入れた介護職員による援助について検討した。その結果、帰宅願望の生起を予測する先行条件を改善することにより、帰宅願望の生起は減少した。これらの研究からも、認知症高齢者への対応方法について検討する際に、機能的アセスメントが活用できる可能性が示唆された。

本研究では、認知症高齢者の「帰宅願望」と「ボランティアにとって理解が困難な発言(例えば、唐突に「ごめんなさい」と言われるなど)」が継続した場面と消失した場面での、ボランティアの関わりの特徴について、ABC観察法を用いた機能的アセスメントを用い、ボランティアの関わり方が認知症高齢者の反応に及ぼす影響について客観的に示すことにより、認知症高齢者とのコミュニケーションを円滑にする方策について検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

(1) 認知症高齢者

本研究では、A市郊外にある認知症高齢者グループホームB(以下、グループホームと記す)を研究フィールドとした。グループホームの定員は、9名であった。本研究では、グループホームに入居している認知症高齢者(以下、入居者)のうち、帰宅願望がみられた入居者a(女性、76歳)および唐突に「ごめんなさい」などの発言があり、ボランティアにとって意味の理解が困難な発言がみられた入居者b(女性、80歳)を調査対象とした。

(2) ボランティア

認知症サポーター養成講座を受講した60代および50代の女性2名(以下、ボランティアCおよびボランティアDと記す)を対象とした。どちらのボランティアも認知症高齢者と関わるボランティア活動は初めてである。また、各ボランティアの活動開始時に合わせて調査を実施した。ボランティアは、1~2週間に1回程度、グループホームを訪れ、入居者との時間を過ごした。1回の滞在時間は、約5時間であった。なお、ボランティアCおよびボランティアDが同じ日にグループホームを訪れることはなかった。

2.実施期間

各ボランティアに対し、それぞれ6回(計12回)の調査を行った。調査時間は、ボランティアが活動を行った約5時間を調査対象とした。調査期間は、ボランティアCがX年2月～X+1年6月、ボランティアDがX年1月～X+1年5月であった。

3.事前アセスメント

事前アセスメントとして、職員へのインタビューを行い、入居者の生活状況や特性および支援方針についての情報収集を行った。また、入居者の状況を把握するために各評価スケールを用いて認知機能、日常生活動作能力、行動障害についての評価を行った。認知機能の評価スケールとして Mini-Mental State Examination (以下, MMSE) (北村, 1991) を用いた。MMSE は、30 点満点で得点が低いほど、認知機能の低下が大きいことを示している。食事や排泄等の基本的な日常生活動作能力を評価するために Physical Self-Maintenance Scale (以下, PSMS) (本間, 1991)、食事の準備や金銭管理等の手段的な日常生活動作能力を評価するために Instrumental Activities of Daily Living Scale (以下, IADL) (本間, 1991) を用いた。PSMS は、0～25 点で、得点が低いほど自立度が高いことを示す。IADL は、0～52 点で得点が低いほど自立度が高いことを示す。行動障害の評価を行うために Dementia Behavior Disturbance (以下, DBD) (溝口・飯島・江藤・石塚・折繁, 1993) を用いた。DBD は、0～112 点で得点が低いほど行動障害が少ないことを示す。

4.記録方法と分析場面の抽出

ボランティアと入居者との関わり場面の状況を把握するために、記録用紙を用いて1分間隔で行動観察を行い、ボランティアと入居者a・入居者bとの関わりがみられた場所、その時の行動について記録した。同時にICレコーダーによる録音を行った。録音データは、テープ起こしを行い、会話の内容について詳細に記録した。

本研究においては、ボランティアへのインタビューを行い、ボランティアが入居者への対応に苦慮していた帰宅願望がみられた場面とボランティアにとって意味の理解が困難な発言がみられた場面を分析対象とした。これらの場面について、ABC観察法を用いた機能的アセスメントを用いて検討した。その場面の抽出は、行動観察および録音記録において、ボランティアと入居者の関わりのなかでそれらの発言がみられたひとつの場面を1回としてカウントした。本研究においては、12回の調査において帰宅願望がみられた場面8回、ボランティアにとって理解が困難な発言がみられた場面15回を分析対象とした。

5.倫理的配慮

本研究を行うにあたり、グループホーム入居者またはご家族、ボランティア、施設長に対し、文書および口頭で研究の趣旨について説明を行い、同意を得た。また、ボランティアには、ボランティア活動で知り得た入居者の情報に関する個人情報保護についての同意も得た。

III. 結果

1. 評価スケール

各入居者の認知機能、日常生活動作能力および行動障害の程度については、表1に示した。各評価スケールの結果から、入居者aおよび入居者bは認知症レベルが中等度～重度であると判断された。

表1 各入居者の認知機能、日常生活動作能力および行動障害の程度

	MMSE	PSMS	IADL	DBD
入居者 a	2	13	49	28
入居者 b	不可	20	50	23

2. 機能的アセスメントを用いた分析

(1) 帰宅願望がみられた場面

図1に、帰宅願望に関する発言が消失した関わりと継続した関わりを示した。

ボランティアが入居者 a の訴えを傾聴すると同時に、散歩など入居者 a の訴えに関連した別の行動を提供した場面（図1④⑤）やトイレへの誘導（図1②）および洗濯物など入居者 a が興味をもつものを提示した場面（図1①③）において帰宅願望に関する発言が消失した。また、関わりの途中でボランティアが他の入居者と会話を行ったり（図1⑧）、「もう少し、おって下さい」など口頭での指示のみ（図1⑥⑦）では、帰宅願望に関する発言が継続される傾向がみられた。

(1) 帰宅願望が消失した状況		
A 先行条件		B 行動
状況要因	直前のきっかけ	
①・リビング ・入居者がリビングの椅子に座っている	ボランティアが入居者の近くに来る	「もう帰る」「お金をおろしたいから」とボランティアに言う
		→ ボランティアが「土曜日から銀行は休みです」と言う → 入居者に洗濯物を見せ、「これはどうしたらいい？」と尋ねる (→入居者がボランティアに洗濯物について説明する)
②・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている		「ここ出ていかないけん」とボランティアに言う
		→ ボランティアが「それなら、先にトイレに行きましょうか」と言う (→トイレ後、リビングに来て、椅子に座る)
③・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている		「帰ろうかね」とひとりでも度々言う
		→ ボランティアが入居者のバッグの中身を指さして、「夕飯食べるためにお箸を持って来てでしよ」と言う → 夕食について話しかける (→入居者がバッグの中の箸をさわり、箸のことについて話す)
④・洗濯物を干す部屋 ・入居者とボランティアが洗濯物を干している	洗濯物を干し終わる	「帰る」とボランティアに何度も言う
		→ ボランティアが「お散歩に行こう」と言う (→ボランティアと散歩へ行く →グループホームへ戻り、「気持ちよかった」と散歩のことを話す)
⑤・リビング ・他の入居者とボランティアが洗濯物をたたんでいる	ボランティアのところへ入居者が来る	「我が家へ帰ります土地がなくなります」とボランティアに言う
		→ 入居者が話をあいづちを打ちながら聞く → ボランティアが「外へ行ってみましょうか」と言う (→ 庭のベンチに座り、風景や昔話をする → グループホームへ戻る)
(2) 帰宅願望が継続した状況		
A 先行条件		B 行動
状況要因	直前のきっかけ	
⑥・リビング ・皆でおやつを食べている	おやつを食べ終わる	「帰ろうかね」とボランティアに言う
		→ ボランティアが「お仕事を頼みたいから、もう少しおって下さい」と言う (→入居者は「そうね」と言うが、しばらくして、「帰ろうかね」と繰り返す)
⑦・リビング ・ボランティアが食器を洗っている	ボランティアのところに入居者が来る	「私、帰ります」とボランティアに言う
		→ ボランティアが「一緒に帰りましょう後からお散歩しましょう」と言う → ボランティアが行っている家事を入居者に手伝ってもらい (→ 家事をしながら「帰る」と繰り返す)
⑧・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている	入居者がボランティアに鍵について話している	「そろそろ帰ろうと思って」とボランティアに言う
		→ ボランティアが「帰りますか」と尋ね、入居者の話をしばらく聞く → 話の途中でボランティアが他の入居者へ声をかける (→入居者は「してくれる人がおらん」とひとりごとを言い、座っている)

図1 帰宅願望が消失した状況と継続した状況

注1) 結果においては、ボランティアが関わった後の入居者の行動を(→顔末)として記した。

注2) 今回の行動観察において該当する行動が観察できなかったところは、空白とした。

(2) ボランティアにとって理解が困難な発言がみられた場面

図 2-1 にボランティアにとって理解が困難な発言が消失した関わり、図 2-2 に継続した関わりについて示した。その結果、入居者 b の話を傾聴したり (図 2-1④⑤)、手をつないで傾聴した場面 (図 2-1①⑥⑧⑨)、一緒に行っている作業についての会話をを行った場面 (図 2-1②) においては、「痛い」「ごめんなさい」などの発言が消失した。

A 先行条件		B 行動	C 結果条件
状況要因	直前のきっかけ		
①・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている		「痛い」とボランティアに言う	・ボランティアが「どこが痛い?」と言い、手をさする →・ボランティアが「手がぬくくなったね」と言う (→・入居者が「あら、本当」と言い、笑う)
②・リビング ・入居者とボランティアが入居者とボランティアが一緒に雛人形を飾る作業を行っている	入居者とボランティアが一緒に雛人形を飾る	「気の毒でたまらない情けない」とボランティアに言う	・ボランティアが「ここでもいい?」と飾りつけについて聞く (→・入居者は返事をし、笑う)
③・リビング ・入居者が椅子に座っている	ボランティアが入居者の横に立つ	「気の毒でたまらない出ていこう」とボランティアに言う	・ボランティアが「出ていこう?」と入居者の言葉を繰り返す →・天気の話をする (→・入居者が笑う)
④・リビング ・他の入居者とボランティアが洗濯物をたたんでいる	入居者がボランティアの近くに来る	「ごめんなさい」とボランティアに言う	・ボランティアが「謝ることないですよ」と言い、洗濯物を入居者に渡す →・入居者に「お座り下さい」と言う (→・入居者が「すみません」と言い、椅子に座る)
⑤・リビング ・他の入居者とボランティアと一緒に会話をしている		「お許し下さい」とボランティアに言う	・ボランティアが「かわいそうなことは忘れましょう」と言う (→・入居者が笑う)
⑥・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている	ボランティアが他の入居者と会話をしている	「かわいそうでかわいそうで」とボランティアに言う	・ボランティアが「かわいそうでたまらんかった?」と言う →・手をつないで、入居者の話を聞く (→・ボランティアの呼びかけに対し、入居者が「そうですね」と言い、頷く)
⑦・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている		「かわいそうでたまらんね」とボランティアに言う	・ボランティアが「たまりませんね」と入居者の言葉を繰り返す →・入居者の子育ての話を聞く (→・入居者が「幸せ」と言い、笑う)
⑧・リビング ・椅子に座り、他の入居者と一緒にぬりえをしている ・ボランティアは、入居者の横に座っている		「私、悲しい」とボランティアに言う	・ボランティアが「なんで悲しいの?」と言う →・入居者の話を聞く →・ボランティアが入居者の手を握る (→・入居者が「こうしてくれればいいですよ」と言う)
⑨・リビング ・他の入居者とボランティアと一緒に椅子に座っている	ボランティアがリビングに来る	「お願い致しますお願い致します」とボランティアに言う	・ボランティアが「こちらこそお願いします」と言う →・手を握って、入居者の話を聞く (→・入居者が「うれしいことおっしゃって下さって」と言う)
⑩・リビング ・ボランティアと他の入居者が会話をしている	ボランティアと他の入居者が会話をしている 近くに入居者が立つ	「気の毒でたまらない」とボランティアに言う	・ボランティアが「とんでもないです風呂はいりましたか?」と話しかける →・入居者の入浴の話を聞く (→・入居者が「うれしいことでした」と言う)
⑪・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている	ボランティアが入居者のボタンをとめる	「かわいそうでかわいそうで」とボランティアに言う	・ボランティアが「かわいそうですか?ニコニコして生きていったほうがいいですよ」と言い、入居者の首の趣味について聞く (→・入居者が「うれしいことです」と言う)
⑫・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている	他の入居者とボランティアが会話をしている	「かわいそうでたまらない」とボランティアに言う	・ボランティアが「大丈夫ですよ」と言う →・入居者の首の趣味と子どもの話を聞く →・体操が始まったため、会話が中断される (→・入居者の手を持って一緒に体操をする)

図2-1 ボランティアにとって理解が困難な発言が消失した状況

注1)結果においては、ボランティアが関わった後の入居者の行動を(→願末)として記した。

注2)今回の行動観察において該当する行動が観察できなかったところは、空白とした。

また、15 回のうち、話題の転換を行った場面は、5 回であった。入居者 b と会話が成立しやすい天気（図 2-1③）や趣味（図 2-1⑪）、家族のこと（図 2-1⑦）、入居者 b が好む話題（図 2-1⑩）などに話を転換させた場面は、「かわいそう」「気の毒」などの発言が消失し、会話が成立する傾向がみられた。一方、入居者 b の関心のない話題（図 2-2⑮）では、「痛い」などの発言が継続される傾向が示された。

さらに、15 回のうち、会話を中断した場面は、3 回であった。会話が中断された理由は、グループホームの日課である体操が始まったためであった。そのうち、会話は中断されたが、入居者 b とボランティアが手をつないで一緒に体操を行っていた場面（図 2-1⑫）においては、「かわいそう」という発言が消失した。一方、ボランティアが入居者 b と離れた場所で体操を行っていた場面においては、「かわいそう」「お許し下さい」という発言が継続された（図 2-2⑬⑭）。

A 先行条件		B 行動	C 結果条件
状況要因	直前のきっかけ		
⑬ ・リビング ・入居者とボランティアが椅子に座っている		→「かわいそうでたまらない」とボランティアに言う	→ボランティアは、相槌をうちながら話を聞く →・体操が始まり会話が中断される →・ボランティアは、入居者の横から離れる (→・入居者が「気の毒でたまらない」と言う)
⑭ ・リビング ・他の入居者とボランティアが椅子に座っている	リビングに入居者が来る ボランティアが「寒くありませんか？」と言う	→「寒くないですお許し下さい」とボランティアに言う	→入居者の話を聞く →・体操が始まり会話が中断される →・ボランティアは、入居者の横から離れる (→・入居者が体操をしながら「気の毒でたまらない」と言う)
⑮ ・リビング ・他の入居者と一緒に洗濯物をたたんでいる	洗濯物をたたみ終わる ボランティアが他の入居者に話しかける	→「お父さんが」とボランティアに言う	→ボランティアが「おだんご作りませんか？」と言う (→・入居者が「おだんごどころかね、痛い」と言う)

図2-2 ボランティアにとって理解が困難な発言が継続した状況

注1)結果においては、ボランティアが関わった後の入居者の行動を(→顛末)として記した。

注2)今回の行動観察において該当する行動が観察できなかったところは、空白とした。

IV. 考察

現在、高齢者を対象とした傾聴ボランティアが活動しているが、傾聴ボランティアが活動を行う際には、まず、関係性の構築が必要であることが指摘されている（野崎，2005）。関係性を構築するためには、まず、入居者とボランティアとの関わり場面をつくる必要がある。しかしながら、高齢者施設で高齢者との話し相手を行う活動を希望するボランティアの中には、いざ入居者の横に行くと戸惑ったり、会話が成り立たないボランティアがいることが指摘されている（山本，2005）。

また、傾聴・回想の効果については、事例やケースなどの記述による検証が必要であることが指摘されている（野崎，2006）。しかしながら、ボランティアの関わりが認知症高齢者に及ぼす影響について具体的な場面を用いて詳細に検討した例は少ない。

そこで、本研究では、グループホームに入居している認知症高齢者とボランティアとの関わり場面において、ボランティアが対応に苦慮していた帰宅願望および内容の理解が困難な発言がみられた場面を抽出し、それらの発言が消失する関わり方および継続する関わりにつ

い

て ABC 観察法を用いた機能的アセスメントを用いて検討した。その結果、帰宅願望がみられた場面においては、入居者の話を傾聴するだけでなく、入居者が興味をもつ洗濯物などを提示したり、散歩へ誘うなど入居者の訴えに関連した別の行動を提示するなどの関わりを行うことにより、帰宅願望が消失する傾向が示された。話題の転換を行う場合においては、入居者の好む話題や会話を把握しておくことが重要であると考えられる。女性の高齢者との会話に関する先行研究において、髪型や服装のことを指摘することにより表情や語りが活気づくことも報告されている(野崎, 2006)。入居者の好む話題や苦手な話題を把握することは、入居者の混乱を避け、また、関係性を構築するうえでも重要であると考えられる。さらに、先行研究において、認知症高齢者に対し調理活動を実施したことにより、自発的な発話が増加したという事例(林田・山中・窪田, 2004)や1日の会話量が増加したという事例(横山・足利・横田・辰巳, 2002)が報告されている。入居者になじみのある活動を介した会話を行うことにより、入居者の自発的な発言を促すことができる可能性が示された。入居者が好む歌を取り入れることにより、外へ出て行ってしまう行動がなくなった事例(小坂・野沢・吉川, 2003)が報告されていることから、帰宅願望への対応については、傾聴と同時に各入居者に応じた対応を行うことが重要であることが示唆された。

また、入居者bから理解が困難な発言が出る原因のひとつとして、認知症にともなう「失語」が考えられ、日常生活で発せられる語彙が限られていた。認知症高齢者が言語を失うことは、自己の真意を伝える重要な手段を喪失すること(田中・大越, 2007)にもなり、発言の意味の理解が難しい場合であっても入居者の発言の意図を汲み取ろうとする姿勢が重要であると考えられる。ボランティアにとって意味の理解が難しい発言がみられた入居者bは、日常生活の中で使うことができる語彙が限られている。本研究においては、ボランティアにとって発言の意味の理解が難しかったとしても、うなづきや手を握るなどの非言語的コミュニケーションを活用しながら、入居者と1対1で関わることにより訴えがなくなる傾向が示された。このことから、「ごめんなさい」などの言葉を発することが入居者bにとってのコミュニケーションの方法である可能性が考えられた。

重度認知症高齢者が「関心・興味」をもたらす要因を検討した先行研究においては、「視線を合わせる」や「やさしいボディタッチ」など人物の立ち位置や関わりなどが要因としてあげられている(田中・大越, 2007)。本研究においても、言語的コミュニケーションと同時に手を握るなどの非言語的コミュニケーションを用いて1対1で対応していた場面では、意味の理解が難しい発言が消失したことから、言語的コミュニケーションが困難な入居者に対しては、話を傾聴すると同時に、非言語的コミュニケーションを活用した丁寧な関わりが重要である。

認知症高齢者は、一人ひとり特徴が異なり、個別的な対応が重要であると考えられる。個別的な対応を行うためには、今後、様々なボランティアがグループホームでボランティア活動を行った際に、ボランティアと認知症高齢者の関わり場面から得られた情報を個別に整理し、蓄積することが必要である。ボランティアが認知症高齢者への対応に苦慮したときには、

該当する認知症高齢者の蓄積された情報を確認し、職員とともに、具体的な対応方法を検討することが出来ると考えられる。認知症高齢者との関わりを築けないことは、ボランティア活動が中断される理由ともなり得るため、これらの情報は、継続的なボランティア活動の支援においても有効な情報のひとつとなると考えられる。

V. 今後の課題

本研究は、ボランティア活動の時間が限られていたこともあり、分析対象となった場面も少なく、事例検討のみに留まっている。今後、調査対象を増やすとともに、機能的アセスメントに基づいた支援計画を策定し、介入的な研究を行うことにより、ボランティアの関わりが認知症高齢者に及ぼす影響を明らかにすることが必要である。

謝辞

本研究の実施および論文作成にあたり、ご指導頂きました岐阜大学大学院教育学研究科 平澤紀子先生に深く感謝致します。

文献

- 1) Bambara L. M., Knoster T. (1998) Designing positive behavior support plans. American Association on Mental Retardation.
- 2) Carr E. G., Nancy A. L., Scott C. Y. (1999) Hypothesis-based intervention for severe problem behavior. In A. C. Repp, R. H. Horner (Eds.), Functional analysis of problem behavior. From effective assessment to effective support.
- 3) 林田あゆみ・山中克夫・窪田理恵 (2004) 女性痴呆高齢者の調理場面における生活療法的ケアからの介入に関する事例研究. 日本痴呆ケア学会誌, 3(2), 222-229.
- 5) 本間昭 (1991) Physical Self-Maintenance Scale (PSMS). 大塚俊男・本間昭 (監) 高齢者のための知的機能検査の手引き. ワールドプランニング, 99-101.
- 6) 本間昭 (1991) Instrumental Activities of Daily Living Scale (IADL). 大塚俊男・本間昭 (監) 高齢者のための知的機能検査の手引き. ワールドプランニング, 95-97.
- 7) 保科寧子・奥野英子 (2008) 在宅高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアの機能分析ー話し相手ボランティアの事例分析からー. 社会福祉学, 49(2), 111-122.
- 8) 保科寧子 (2010) 高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアトレーニングプログラムの効果評価. 社会福祉学, 50(4), 122-132.
- 9) 北村俊則 (1991) Mini-Mental State (MMS). 大塚俊男・本間昭 (監) 高齢者のための知的機能検査の手引き. ワールドプランニング, 35-38.
- 10) 小坂直樹・野沢由佳里・吉川真由美 (2003) 適切な課題の提供と援助により徘徊等の

- 問題行動を解消した事例. 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 12-18.
- 11) 溝口環・飯島節・江藤文夫・石塚彰映・折繁肇 (1993) DBD スケール (Dementia Behavior Disturbance Scale) による老年期痴呆患者の行動異常評価に関する研究. 日本老年医学会雑誌, 30(9), 835-840.
 - 12) 野瀬真由美・納戸美佐子・中村貴志 (2007) グループホームにおける認知症高齢者の帰宅願望の予防に関する介入プログラムの効果. 福祉心理学研究, 4(1), 65-73.
 - 13) 納戸美佐子・上城憲司・野村美代子・平澤紀子・野瀬真由美・中村貴志 (2010) 傾聴ボランティアにおける情報カードの有効性ーグループホームにおける認知症高齢者を対象としてー. 認知症ケアジャーナル, 3(3), 234-240.
 - 14) 野崎瑞樹 (2005) 高齢者に対する傾聴ボランティアの効果に関する一考察. 日本文理大学紀要, 33(2), 63-69.
 - 15) 野崎瑞樹 (2006) 高齢者に対する傾聴ボランティアの効果の質的検討. 日本文理大学紀要, 34(1), 83-88.
 - 16) O'neill R. E., Horner R. H., Albin R. W., Sprague J. R., Storey K., Newton J. S. (1997) Functional assessment and program development for problem behavior. A practical handbook. Books/Cole Publishing Company.
 - 17) Raymond G.M.(2001) Behavior Modification: Principles and Procedures, Wadsworth (レイモンド・G・ミルテンバーガー (訳) 園山繁樹・野呂文行・渡部匡隆・大石幸二 (2006) 行動変容入門, 二瓶社, 218-225.
 - 18) 田中敦子・大越扶貴 (2007) 重度アルツハイマー型認知症高齢者の表情と見る動きに関する調査研究ー介護老人保健施設入所中のシングルケースの分析ー. 埼玉県立大学紀要, 9, 55-62.
 - 19) 山本浩史 (2005) 高齢者分野のボランティア活動. 岡本栄一 (監) ボランティアのすすめ. ミネルヴァ書房, 129-130.
 - 20) 横山ハツミ・足利学・横田芳武・辰巳恵子 (2002) KOMI チャートを用いた老年期痴呆患者の調理活動の評価. 総合看護, (1), 39-47.
 - 21) 横山貴美子 (2007) 話し相手ボランティアの活動支援としての「定例会」の機能と役割ー「活動への勇気」の後押しという視点ー. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 2, 1-10.

Asian Journal of Human Services
VOL.4 April 2013

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

-
- A Research Study on the Disaster Prevention and Disaster Risk Reduction
of the Rehabilitation Facilities for the Disabled..... **Keiko KITAGAWA**, et al. · 1
-
- Current Conditions and Effectiveness of the Housework Home Care Visiting Helper program in Korea..... **Sunwoo LEE** · 14
-
- Recognition of the Necessity of Practical Disaster Nursing Education
among Nursing Teachers in Japan..... **Hitomi MATSUNAGA**, et al. · 30
-
- The Relationship between Social Participation and the Health Related Quality of Life
of the Community-Dwelling Elderly in South..... **Sookkyoung BAE**, et al. · 40
-
- Inhibitory control measured using the Stroop color-word test in people
with intellectual disabilities..... **Yoshifumi IKEDA**, et al. · 54
-
- Memory Biases in Depression Investigated by the Process Dissociation Procedure
to Develop Countermeasure against Depression..... **Kyoko TAGAMI** · 62
-
- QOL-based research for laws that promotes the employment of persons with disabilities
-Analysis and examinations of using WHOQOL-..... **Haejin KWON**, et al. · 77
-

REVIEW ARTICLES

-
- Korean Rehabilitation Counseling Practice and Personnel Training..... **Hyunuk SHIN** · 88
-
- Theoretical Background of Health Related Quality of Life (HRQOL)
and Literature Reviews on its Definition..... **Aiko KOHARA**, et al. · 103
-
- Recent Research Trends in Survivor Syndrome
-After the Restructuring, the Psychology of the People who Remain in the Organization-..... **Kohei MORI**, et al. · 113
-
- Present Condition and the Subject of Infants with Disabilities Education and Childcare
- Focus to Schools for Special Needs Education Kindergarten Section-..... **Yoshio KOJIMA** · 121
-

SHORT REPORT

-
- Classification of the clinical characteristics for elderly patients with Alzheimer's-type dementia..... **Mayumi NOSE**, et al. · 137
-

ACTIVITY REPORT

-
- Analysis of the communication between volunteers and elderly people with dementia..... **Misako NOTO**, et al. · 149
-